

瀬戸内海沿岸の石材産地における産業構造の変遷

History and present of the building stones and the quarries around the Seto Inland Sea, southwest Japan

乾 睦子^{1*}

Mutsuko Inui^{1*}

¹ 国土館大学理工学部

¹School of Science and Engineering, Kokushikan University

日本列島の基盤となっている岩石は、地域の自然を構成する重要な要素であると同時に、石材や地下資源として地域の産業を支えてきた面もある。たとえば瀬戸内海沿岸には多くの花崗岩体が分布しているため、花崗岩石材の採掘場が集中する大産地である。西洋建築が導入された明治、大正、昭和初期にかけては首都圏の主要な建築物に多くの美しい石材を供給してきた。しかし、現在は安価な輸入製品に圧倒され、少なくとも建材としてはほとんど市場で国産石材を見ることができなくなっている。そこで本研究ではまず、瀬戸内海沿岸に分布する石材産地と、その産地の石材がどの建造物に用いられたか、今どこで見ることができるかをなるべく多く情報収集した。次に、それらの産地のいくつかを訪問してヒヤリング中心の調査を行い、瀬戸内海沿岸部と島々の地理的な条件も含めて石材産地の歴史と現状を明らかにした。

産地調査は主に、現在も墓石や灯籠用の石材を産出し続けている花崗岩の産地で行った。石材採掘・加工業者数は大幅に減少している産地が多いが、瀬戸内海沿岸部には墓石や灯籠、彫刻材料として花崗岩を採掘している採石場がまだ多く残っているからである。それらの産地の中には、当初から墓石灯籠等を主に生産していた産地と、もともとは建材を主に生産していたが建材需要の減少により墓石を主とするようになった産地とがあった。日本の石材産業が縮小した経緯として、単純に海外製品が安価であったというだけではなく、日本の石材産業全体が海外に加工拠点を移したことによって国内の産業構造が変化したことなどが分かった。また、岩石の石材としての性質（色その他の見た目など）以外にも、採掘する際の都合（キズの多さ、目の方向など）、社会的要因（市街地からの距離、土地の所有者と採掘業者との関係など）が産地間の違いを生む要因となっていることが分かった。

キーワード: 石材, 花崗岩, 瀬戸内海, 採石場, 墓石, 産業構造

Keywords: building stone, granite, Seto Inland Sea, quarry, tombstone, headstone